

第13次研究委員会最終報告

1 研究テーマ 「学校経営に参画する事務職員」

2 研究活動の概要

〈研究の過程〉

第13次研究委員会では、第12次の研究の成果を定着させるために、テーマを「学校経営に参画する事務職員」と設定し、参画をより具現化していこうと考えました。

まず、会員から実践例を提供して頂き、『ステップアップ実践事例集』として配布しました。これにより、課題解決のヒントや情報の共有、業務の発展性や方向性を得て、個人のステップアップを目指しました。

会員の意見を踏まえて、「学校経営に参画する事務職員」として、学校における課題を解決し、学校全体のステップアップを図るための、事務職員としての取り組みのあり方を探りました。

取り組みのためには、目標やねらいを明確にし、流れが誰の目にも見えることが不可欠と考え、自分の仕事の進捗状況を確認し、学校における会議時の提案資料に活用できるツールを検討しました。他の職員との関わり、そこに生じる課題、期待される効果、校長会・地教委に協力要請が必要な点などを記載できる「実効策検討シート」を用いることにしました。これにより、自らの力量そして学校全体の事務改善・運営機能を高めることを企図します。「実効」とは実際にあらわれる効力や効果のことをいい、「実行」（実際に行うこと）とは異なる意味で使用します。そこに、シートに書き込むことによる効果を期待し、学校経営参画への意気込みを込めました。

まず、研究委員会で実効策検討シート作成に取り組んでみました。それぞれ、自校における課題を出し合いました。そして、一つの課題に対してどのように取り組んでいくかを複数で考えました。グループ討議を通して解決策を検討することで、一人では越えられなかった壁を越える手立てを探っていくことができます。さらに、学校経営スタッフとしての機能を果たすアイデアが段階的に提供され、具体的に動き出すきっかけを得ることができると考えられます。実際にグループ討議を行うことによって何が問題なのかがより具体的になりました。また、異なる意見の交換だけではなく、同じ意見もまとめることによってよりよいものができることが分かりました。

次に、会員の皆さんに実際に実効策検討シートを使って頂きました。

その結果、実効策検討シートの様式については、「全体的に項目数・記入箇所が多く、それぞれの項目で書く内容が同じになってしまう。」との感想を受け、シートそのものの様式を見直すことにしました。

まず、「実効策」「何を」「どのように」の項目の区別が分かりにくく、どれも同じ内容の記載になってしまいがちな点について改良しました。「実効策」については、実行するポイントを記載し、「何を」「どのように」の項目を「具体的な方策」とし、具体的な取り組み

の方法・内容について詳しく記載します。

また、それぞれの「実効策」にチェック欄を設けて、進捗状況や自己チェックおよび振り返りに利用できるようにします。実行の日付などを書き込むのもよいでしょう。実効策の総まとめとして、積み残した課題や反省、今後の取り組み予定など「成果」「今後の課題」を書く欄を設けました。

改良シートを利用して、研究委員会では河北大会に提示した課題等についてモデル案を作成してみました。

第12次研究委員会から受け継いだ学校経営に参画する事務職員へのシフトチェンジと、北越地区研究大会で得た職務内容の「広がり」から「深化」を念頭に置きつつ、研究を進めてきました。

シートに対する課題・問題点で、「仕事を行う上で、このようなシートを使う必要性があるのか」という疑問が出されていました。確かに課題を解決していくためには、事務処理方法のマニュアル化、学校間連携・地区事務研による学校事務支援システムの構築なども重要です。

しかし、他者と連携しながら、学校のステップアップに貢献していく視点をどのように身につけていくかということも、事務職員にとって重要であると考えます。説明責任を果たすという観点からも、シートを使うことは有効です。また、各個人においては、日常業務の中から見つけた課題解決のためにシートを活用し提案に役立てたり、人事考課の目標管理、自身のメモ、異動の際の引継書などに活かしていくこともできていると考えています。

さらに、ライフステージごとに学校経営に参画する学校事務職員の姿に近づく手立てとして、以下のような思いをもって、シートを活用することを提案します。

ステージⅠ（初任から3年程度）

「まねる」

基盤となる知識を学び、先輩の実践をとにかくまねてみる

まねる中で自分なりのテクニックを身につける

学校における事務職員としての自分に求められる役割を知る

自分流を客観的に判断してもらうために、先輩事務職員に助言を求め

る
先輩事務職員や他の学校職員と接する中で「自分の理想の事務職員像」の輪郭をつかむ

ステージⅡ（3年程度から15年程度）

「創る」「練る」

視野を広げ、得意分野を究める

自分の得意分野で、後輩事務職員に身近な先輩として助言する

研究会の中で、積極的に発言し、多くの先輩から助言をもらう中で
偏らない資質を身につける

「自分の理想の事務職員像」に近づくために、何が必要か何を改善すべきか分析する

仕事の効率のみを求めて、つくられたマニュアルにばかり頼らず、そのものの持つ意味を考える。コピー&ペーストや昨年度文書の上書きばかりを繰り返しては得られない本質を探り、構想を練る

ステージⅢ（15年程度から25年程度）

「分析する」「挑戦する」

学校経営に参画していく中で、自分が企画したことがどのように反映しているかを、冷静に分析する

教育全体の動きを察知して、新たな分野に挑戦し、学ぶ姿勢を持ち続ける

子どもの実態や保護者・地域の要求に応じ、事務職員に求められていることを追求する

急速に変化する社会状況に合わせ、対応していく力を身につける

ステージⅣ（25年程度から）

「伝える」「広める」「働きかける」

研究会において、若手事務職員に自分の経験を惜しみなく伝える
常に資質向上のために研さんを積み、挑戦する気持ちを持ち続ける
制度的に改革、改善が必要な事項については、関係機関への働きかけに努力を重ね、制度確立、機構整備に貢献する

学校経営に積極的に参画し、調整力を磨き、どうしたら組織が円滑に機能し活性化するか、学校全体を見渡し実践する

〈成果と課題〉

第13次研究委員会では、研究テーマを「学校経営に参画する事務職員」と設定し、皆さんが求めている参画をより具現化することを目標に研究を進めてきました。ツールの一つとしての実効策検討シートを提案したわけですが、その他にも手立てはいろいろあるはずです。

石川県公立小中学校教育事務研究会は、学校教育法にある「事務に従事する」職員として、本務と果たすべき役割を知り、専門的知識を深めてきた時代を経て、時代に即した事務職員の在り方・役割を探ってきました。平成10年に出された中教審答申を受け、「学校経営スタッフとしての専門性を高め、学校経営に積極的に参画する」事務職員として、学校経営参画に関する研究が始まり、現在に至ります。

新しい時代の学校経営に参画する「新しい時代の事務職員」として学校組織力を高めるために、一人一人が自分の視点で考えを出し合うことが大切です。さらに、そのことが事務研究会全体に還元され、再び各事務職員を通して各学校のレベルアップにつながっていくのではないのでしょうか。「小さな取り組みだから」と自分だけのものにしていませんか。あなたのその実践は、まさに学校経営参画なのです。